

えみほころ 栽培暦 (令和8年3月版)

埼玉県農業技術研究センター

生育ステージと主な作業の目安

品種の特性 (比較品種: 「彩のかがやき」)

- 出穂期及び成熟期は「彩のさずな」と「彩のかがやき」の中間。
- 稈長は10cm程度長く、穂数は同等～やや少ない。
- 玄米千粒重は重く、収量は同等。
- 食味は「彩のかがやき」「彩のさずな」並の良食味。
- 高温登熟性は「強～やや強」で、白未熟粒の発生が少ない。
- 病害虫抵抗性は葉もち「やや弱～弱」、穂もち「中」、紋枯病「弱」。イネ縞葉枯病は抵抗性。
- 障害型耐冷性は「やや弱」。
- 耐倒伏性は「やや強」。

病害虫防除

- 紋枯病「弱」のため、登録のある薬剤を使用する。葉もち「やや弱～弱」、穂もち「中」のため、いもち病の多発生が予想される場合は防除する。

中干し

- 有効分げつ確保(20～25本/株)後、直ちに中干しを開始する(早植: 移植後35日頃、普通期: 移植後30日頃)。田面に小ヒビが入る程度(7～10日程度)行う。

施肥

- 総窒素量は早植で8～9kg/10a程度、普通期で7～8kg/10a程度を基準とする。ただし、ほ場の地力や堆肥等有機物の施用状況等にあわせて増減する。過剰施用は倒伏と食味低下のリスクが高まるため避ける。
- 穂肥施用時の葉色(群落値)が4を上回る場合は、施用時期を5日遅らせ、施用量を3割程度減らす。

収穫

- 高温時には登熟日数が極端に短縮することがあるとともに、胴割米が発生しやすくなるため刈り遅れないよう特に注意する。
- 異常気象や稲体の窒素栄養状態等により、収穫適期の出穂後日数、帯緑割合が変動するため、積算気温を目安に収穫する。
- 登熟期に日照不足が続くと穂の下部の登熟が遅れることがあるが、このような場合でも積算気温を目安に収穫する。

乾燥調整

- 急激な高温乾燥は、胴割れの原因となるため避ける。
- 適正籾水分: 収穫時 25～20% 乾燥仕上時 14.5～15.0%
- 「えみほころ」は粒厚が厚いため、粳すり時のロール調整に注意する。

秋耕

- 稲刈後、秋の間に稲わらや籾殻、稲株を漕き込む。
- 秋耕を行うことで冬の間に稲わら等の分解が進み、水田の肥沃度向上や、次作水稻のガス害や窒素飢餓の防止となるとともに、温室効果ガスであるメタンの排出が削減できる。

早植栽培		4月		5月		6月		7月		8月		9月	
		下旬	中旬	下旬	中旬	下旬	中旬	下旬	中旬	下旬	中旬	下旬	中旬
生育ステージ	移植		移植期			有効分げつ	最高分げつ期	幼穂形成期		出穂期	収穫の目安		
	50～60株/坪										出穂後日数	36～44日	
水管理						中干し	間断かん水	深水	間断かん水	落水			
主な作業	播種						中干し	紋枯病防除	もみ枯細菌病防除(液剤)	穂肥施用	もみ枯細菌病防除(液剤)	カメムシ防除①	カメムシ防除②
	基肥		箱剤散布・移植	除草剤散布		移植後35日頃							収穫作業
	窒素成分で 5～7kg/10a		基肥散布・代かき	登熟期に高温が予想される場合の追肥		窒素成分で 2～3kg/10a (出穂前20～15日頃)							
				移植後45日頃 葉色3.5以下の場合 窒素成分で 1～2kg/10a		幼穂長3～15mm程度							

普通期栽培		5月		6月		7月		8月		9月		10月	
		下旬	中旬	下旬	中旬	下旬	中旬	下旬	中旬	下旬	中旬	下旬	中旬
生育ステージ	移植			移植期		有効分げつ	最高分げつ期	幼穂形成期		出穂期	収穫の目安		
	50～60株/坪										出穂後日数	39～48日	
水管理						中干し	間断かん水	深水	間断かん水	落水			
主な作業	播種					中干し	紋枯病防除	もみ枯細菌病防除(液剤)	穂肥施用	もみ枯細菌病防除(液剤)	カメムシ防除①	カメムシ防除②	収穫作業
	基肥		箱剤散布・移植	除草剤散布		移植後30日頃							
	窒素成分で 5kg/10a		基肥散布・代かき	登熟期に高温が予想される場合の追肥		窒素成分で 2～3kg/10a (出穂前15日頃)							
				移植後45日頃 葉色3.5以下の場合 窒素成分で 1～2kg/10a		幼穂長15mm程度							

※R3～R7年のデータを基に作成。